テクストの地平

富山太佳夫　加藤文彦　石川慎一郎 編

英宝社

森晴秀教授
古稀記念論文集

テクストの地平

英宝社

七十にして矩をこえられず

森　晴　秀

論語では正しくは「七十にして心の欲するところに従いて矩（のり）をこえず」というらしいのであるが、こころの欲するところに従って自由奔放に生きた記憶もなければ、矩をこえるなどといった快楽を味わったこともない。ただ旧国鉄の、揺れの多いローカル線の狭軌をなるべくならば逸れずに、各駅停車で走ってきたということであろうか。しかし、そのために、もしかすると人生というすべて初体験の、面白いがときおり荒々しい、窓外の風景は十分に楽しんできたのかもしれない。

あの人間でもなんとか生き長らえたので、この辺りで一度けじめをつけておいてやろうという暖かいお心からであろう、このような晴れがましい機会を与えられることになった。

大変ありがたく、しかし少なからず当惑もあり、この種の書物をたくさん手がけている英宝社の宇治正夫さんに、何を書くべきかと教えを請った。こういう本には論文ではなく、思うがままにエッセイを書けばいいとのことであった。だが、読者を唸らせうるような文章などは力量を超える。以下、紙面の無駄遣いをかえりみず、英語・英文学（大半は特定の恩師、友人をめぐる記述）と自分とのかかわりの一端を記すことに

する。

最初に断っておかねばならないが、私は自分を学者だとは思っていない。英語の教師だという自覚しかない。英語は伝達の手段、文学は楽しむべきものと考えている。前世紀後半から日本にも流入してきた各種の新しい批評理論は、例えばバフチン、ジュリア・クリステバ、ロラン・バルトなど、どれをとっても難しくて私には理解できない。自分が理解できない腹いせに、このような過激なことを書くのでは決してないが、さらに多くの他の理論家たちから引用した文章を、あたかも錦の御旗のように振りかざし、それが分からなければ研究者に非ずといった如き勇ましい方の論文に限って、作品からの引用文の日本語訳が間違っていたり、口頭発表をすれば、英語の発音が怪しかったりする。生齧りの批評理論の中途半端な受け売りだけで、その実、対象とする作品の理解も十分にはできていないような文章の如何に多いことか。

少々の読み間違いはよいとしても、自分が標榜する「新しい」理論を実際に使うことによって、特定の文脈の旧来の解釈に何らかの変更や追加を実証的に導き出す生産的な仕事であれば、それは学問と認められるであろう。そういった目標がないものは研究ではない。新進の人の場合にはある程度は仕方ないが、いやしくも学界のリーダーシップを取る立場にあるはずの人の中にも、このようなお粗末な例が少なからずあることを私は知っている。

「研究書」と称しながら、そのように信用できない書物も、私はこれまでにたくさん書評する機会を与えられたが、あまりのお粗末さに、最近では一度中味を見て、駄目なものは書評を辞退させていただいている。

さて、新制高校併設中学三年生（十五歳）の折、英語のリーダーにワーズワスの『水仙』があった（これ

は旧制のレベル）。担任が一週間で暗誦できるように覚えてこいと命じた。宿題をやってきたのは私のみ。それには深いわけがあって、その年、学制の変更で男子中学から女学校に転校させられ、生れて初めて女生徒のま横に座った。毎日何かを教えろと迫まってくる。そのうちに苦痛が快楽に転じ、英語だけは予習が完璧、自信をつけていた。この不純な動機が英語教師からの絶賛を生み、生涯英語に付きまとわれる羽目に陥ったのである。だが、最初にワーズワスを暗記したのは得がたい収穫だった。

戦後すぐ、母親を子宮癌でなくしていたので、医学部に入って医者になるつもりであったが、高校の担任に嘲笑された。当時の大学入試科目は七教科。だが英語の力だけでは入れないということなどまったく知らない。無謀なのに、英語の入試問題で当時としては難関だった神戸大学を選ぶが、合格したのにはまた別のわけがある。地学と数学と生物の教科書を丸暗記した。地学は自己採点で満点。数学は教師がかけてくれた山が全部あたった。もう少し早めに準備をしておけば、今ごろは白い巨塔を悠然と退官していたかも知れない。

その頃の大学すべてに当てはまるかどうかは承知しないが、入学後の最初のオリエンテーションは卒論指導であった。担当は英語学教授神津東雄先生。工藤好美先生が準備されたというプリント三枚。古今東西の古典が必読書としてぎっしり詰まっている。教養の一年半のうちにそのすべてを読み、同時に、英、独、仏、ギリシャ、ラテンの単位をすべて習得しておくべし、さもなくば英文学科には受け入れぬ、との厳しい宣託が下った。だがラテン語で最後まで生き残ったのは私以外に二名のみ。それでも英文学科には二十名が進学を許された。

いい加減な受験勉強で入ったのを申しわけなく思い、ラムの『エリア随筆』、オスカー・ワイルド『ドリ

アン・グレイの画像』などを含む初年度の教科書は最初の一週間で予習を終え、卒論の準備にとりかかった。寮の同室に青木庸效（のぶかず）君（神戸大学名誉教授、現神戸松蔭女子学院大学教授）がおり、*The Rainbow* を読まなくっちゃとかいって原書を振り回していた。それを私が横取りし、彼がハクスレーをやり始めたのが、お互い運の尽きというものであったらしい。十八歳の秋である。

工藤先生はその頃、すでにご高名も確立し、鑑賞から始められた文学が、批評を経て再び鑑賞に戻っておられた。英語の音に関する感覚は実に鋭く、朗読しながら音の重要な事を教えられた。テクストはペイター『享楽主義者マリウス』。五、六年はかかって講読されていたので、我々のクラスはほんの数章読んだだけだが、先生の読書の楽しみかたとペイターの感性に強く惹かれた。

土居光知『文学序説』は先生から紹介された。その中で「厭わしき山国」から「山の美」への変容を実証する「自然の愛の発達」の章にはとりわけ惹きつけられたが、それは青木君から略奪した『虹』の体験を経て、四十二年後の編著『風景の修辞学』（英宝社、一九九五）の主題にまで続いていたように思われる。

工藤先生は当時、奈良女子大学との兼任で、同大の木造官舎にお住まいであり、神戸までの通勤にはご不便であったが、神戸大学英文学科の充実には全精力を注がれた。先ず、山本忠雄教授の招聘によって、教授三名（神津、工藤、山本）に加え、後藤和夫助手という陣容となり、それに教養部から、浜田政二郎、米田一彦、二宮尊道、寺田建比古の四教授が応援した。工藤先生はさらに谷口陸男教授を文学部専任として招聘されたので、今から思えば、当時は神戸大学英文学科の黄金時代であった。それだけではない。集中講義に、安藤一郎、福原麟太郎、海老池俊治、矢野貞幹の錚々たる方がたがそれぞれ丸一週間、講義された。その全部の単位を頂くというたぐい稀な幸運に恵まれたわけだ。広島女学院大学に大学院を設置するにあたって、

設置審から多すぎるといわれたほどに多くのⒹや学外講師をお願いしたのも、工藤先生のことが忘れられなかったからである。

工藤先生がいつも口にされた戒めは「常に純金に触れておれば、直ちに不純なものと純金の区別がつく」であったが、山本先生の教えの中心は「文体論は実践であって理論ではない」であった。米田先生には、英語を読む楽しみを教えられた。神戸に招いて下さったのも米田先生で、日常生活でも随分とお酒をご馳走になった。ご臨終前に、葬式と蔵書の処分は森に任せろ、とお嬢様に遺言された。しかし、お流れを頂戴する機会が多かったのは神津先生の方かも知れない。現在大学院では必ず毎年チョーサーを教えているが、中英語は神津先生の直伝である。

私がその後、理論の空転を避け、論拠をテクストの実践的な読みに求めようとするのは、いまだに工藤、山本両先生の強い影響下にあるからであろう。同じことは、大阪大学大学院でお世話になった村上至孝先生、毛利可信先生、吉田安雄先生についても言える。三先生はＯＥＤの正確な読み方を教えられた。当時、さしたる批評理論はまだなく、あったのはしいて言えば「評伝」である。このような先生方は、英語の実力養成と文学「鑑賞」を大切にした古きよき時代を代表する碩学たちであった。

大学院の教室では教えを受けなかったが、山川鴻三先生の素晴らしい学問とお人柄については今更申し上げるまでもない。学位論文の提出は村上先生のご在任中には間に合わなかったので、先生は山川先生に申し送って下さっていた。山川先生は遅筆な私を優しく叱咤激励してくださり、なにかにつけてご指導を頂いた。筆記試験には約三時間、端然とした姿勢でただ一人の受験生を監督してくださった。それは人生で最も緊張した時であり、いまだに鮮明な記憶として残っている。

この原稿を書き終わった翌日、山川先生のご新著、『ヴェニスと英米文学――シェイクスピアからヘミングウェイまで』（南雲堂）を頂いた。先生は一九一七年のお生まれで今年八十七歳でいらっしゃる。お若い頃から強靭な精神とお体、さらには鋭敏かつ柔軟な感性に恵まれていらっしゃるが、このたびのご本は、長年ヨーロッパ、特にヴェニスに旅を重ねられ、この町とかかわりのあった十三人の文学者を扱われている。このご高齢で、これだけの精力的なお仕事をなさるとは、もはや後塵を拝するすべもない。私などは、すでに記したことでも分かるように、古き良き時代と新しき「悪しき?」時代に挟み撃ちされ、そのいずれにもなりきれないで喘ぐ生半可な世代に属するものだと、己の浅学を生れた時代のせいにしようとしていたのだが、実は怠惰な人間に過ぎなかったのである。

大阪大学時代とその後の人生で最もお世話になったのはアール・マイナー教授である。フルブライト交換教授として京都大学と兼任であった。略歴、業績についてはあまりにも著名な人であったので、詳細は書かない。昭和六十二年、山片蟠桃賞の受賞に際し、私も推薦者の一人であったが、送られてきた業績一覧はA4で三、四十枚だったかと記憶する。UCLA の教授だった頃から彼は毎朝、図書館で仕事をし、一年経てば一冊の本にまとまった。〝まさに『職業としての学問』を地で行く人であった。

修士論文は *The Rainbow* と *Women in Love* の比喩構造の違いを論じたもので、彼の着任以前に提出済みだったが、意見を求めるために読んでもらった。早速丁寧なメモを頂き、*ELH* に投稿しないかと言われた。これはアメリカの博士論文の一部などを載せるレベルの高い研究誌。ヒリス・ミラーが編集長だった。中味はF・R・リーヴィスの *D.H.Lawrence:Novelist* (1955) の前記二作品の解釈に反論したもの。書き直した原稿をマイナーさんが徹底的に直してくれた。だが、ミラーさんが考えていたリーヴィス批判とほぼ同じ趣旨

なので、当面採用を見送るというよく理解できない意見が、紹介者のマイナーさんを通じて伝えられてきた。一年後にミラーさんが気を変えたらしく採用となった。その後ご本人と出会った際、あれは本当だったかと尋ねたが、そんな記憶はないね、とそっけなかった。

しかしこのミラーさんにも私は弟子入りしている。彼の *Fiction and Repetition* (1982) の第一章の最後に、「批評に関する昨今の論争では、各種の理論、術語、理論上の結論などに関心が向けられ、その理論によってひきだされる具体的な読みに充分な配慮がなされていない。・・・文学批評で重要なことは、どの個所を引用するかということだ」という発言があるからだ。

一九六三年の夏、*Orient / West* という英語の雑誌が届いた。Earl Miner, "An Open Letter to Haruhide Mori"という記事が載っている。内容は、ヘンリー・ジェイムズ論が *American Literature* に採用された京都大学の渡辺久義さん（H・ジェイムズの過去完了形の用法などについて、卓越した業績を発表されていた）と *ELH* に採用された森が、日本の若い英米文学研究者ではアメリカのトップレベルの研究誌に載るのは初めてで、それまでにも日本でそれなりの研究はあったはずだが、載らなかったのは、あるいは載せなかったのは、双方に偏見があり、その可能性を日本人も思いつかなかったからである。記事の大半は日本と欧米の考え方の落差、偏見について徹底的に論じたものであり、我々二人は稀な実例としてお褒めに預かった次第。この事件は四十年以前のこと、今では欧米の研究誌に文学、語学に関する日本人の論文が出るのは珍しくない。マイナーさんはこの雑誌の編集にも携わっていた。この論文以後、彼は、お前は俺の友人になった、今後はファーストネームで呼び合おうと言い出した。

アールは同僚の金持ちのロバート・フォーク教授と掛け合い、大学に奨学資金をつくり、その中から留学

賞として私に二千四百ドルを与えた。フルブライトが二千二百ドルの時代だ。しかし渡航旅費がない。フルブライト委員会の世話で、アメリカ大学夫人協会という団体から片道旅費を頂いた。最初はフルブライトに申請したが、渡航目的が「オルダス・ハクスレー研究」であり、イギリス人の研究に行くのにアメリカ政府は金を出せないという説明であった。アールはそれに憤慨し、時の駐日大使、ライシャワーに抗議の手紙を送った。

とにかく無事にUCLA着。授業の傍ら、UCLAの客員教授もしていたハクスレーの資料を集めた。インド古代の神秘思想をハクスレーが知ったのは、マクス・ミューラーなどの翻訳を通じてだったと思われるが、私は高野山大学の講師時代に、バガバッド・ギータや、アメリカでのラーマクリシュナ運動などに興味をもっていたために、ハクスレーとヒンヅー教との繋がりをひも解くのは比較的楽であった。この留学で、スワミ・ヴィヴェカーナンダの著作に親しみ、ハクスレーやクリストファー・イシャウッドなどへの影響関係を考えるという別の楽しみを得た。二年目は自分で職を見つけ、ケンタッキー大学で日本学科を作った。このときの推薦者はマコト・ウエダ（上田眞）とアール・マイナーだった。

アールの恩恵はこれにとどまらない。アメリカでの二年ののち、ボドレイアンで仕事をしたが、ちょうどオクスフォードに来ていた彼に、図書館の保証人から宿の世話に至るまで、おまけにオクスフォード英語の喉に響かせ方、コックニーのアスピレーションの原則に至るまで、ほぼすべてお世話になった。その後、作者の口出しに興味をもっていたとき、ファクスですぐにミルトンの実例を教えてくれもした。『風景の修辞学』（前出）の編集を思いついたときも、彼は一番に「名所（などころ）としての自然――白河の関から松島への芭蕉の旅――」（米本弘一訳）という立派な論文を送ってくれた。

蛇足をもうひとつ。私のパイプ歴はアール・マイナーとの初対面、教室でパイプを吸うアメリカ人教師に驚嘆した二十七歳の四月初旬の夕刻から始まる。彼ご愛用の缶入り「桃山」の芳香に酔った。以後四十二年間、禁煙する人を逆に意志薄弱と内心で嘲り続けてきたが、その終局がすでに忍び寄っていた。

彼と最後に出会ったのは、娘の結婚式にインディアナまで奥さんのジン子さん(Jenny、北海道生れなので、彼はそう呼んでいた)と出てきてくれた四年前だが、遺伝で肝臓に鉄分が蓄積するという以前からの難病ですでに背中が曲がり、座りにくそうであった。若い頃は背筋の伸びた、格好のいい青年学者だった。思えば親子二代でお世話になるという奇しきご縁であった。

奥さんと二人、医療付き老人ホームへ移り、二月頃から体調を崩していたらしいが、去る四月十七日、自分でお茶を入れるとき、転んでそのまま意識が戻らなかったと聞く。最後は、“Earl looked peaceful”とジン子さんが皆に伝えた。本人の遺志で葬儀などは行わず、親しい学生が集まっただけだったが、大学は半旗を三日間掲げ、五月下旬に追悼集会が大学主催であり、アール・マイナー基金が設置された。昭和二年生れの兎年、享年七十七歳であった。

アール・マイナー逝去の報に接したのは彼の死後二日目、メイルに入っていた。その後「桃山」がまったく減っていないのに気づいたのはさらに一ヵ月後のことであった。来年の彼の命日には、しかし、彼を偲ぶ口実を見つけることになるかも知れない。

これほどお世話になった親しい友人で恩師でもあった人を失ったいま、果たして自分はどれだけ人さまや学生たちに役立つことをしてきただろうかと危ぶむ。今しばらくはこの衝撃から逃れ得ないだろう。

最後に、ご多忙のなか、この書物の発刊を考え、編集の労をとってくださった富山太佳夫さん、加藤文彦さん、素晴らしい文章の数々をお寄せ頂いた方がた、そして事務処理のすべてを引き受けていただいた石川慎一郎君の熱意と、宇治正夫さんの変わらぬ友情に、心から御礼を申し上げる。皆さんの学恩には到底お報いできないが、あと二年での引退後も、少しでも文学と英語を読む楽しみを次世代に伝えていければと願うのみである。

——「生涯をかけて学ぶべきは死ぬことである」（セネカ『人生の短さについて』）

（二〇〇四、七、二〇）

森　晴秀略歴

一九三三年十一月二十二日、大阪市北区天満橋筋三丁目に生れる

学歴・職歴

一九四〇、四　大阪市立松ヶ枝尋常高等小学校入学
一九四四、四　空襲、疎開により、大阪府北河内郡、蹉跎小学校転校
一九四六、四　大阪府立四条畷中学校入学（旧制）
一九四八、四　大阪府立寝屋川高等学校併設中学校転校（新制）
一九四九、四　大阪府立寝屋川高等学校入学
一九五二、四　神戸大学文学部入学（姫路分校）
一九五六、三　同卒業
一九五六、四　京都府立河守（現、大江）高等学校教諭（図画、世界史も担当、但し無免許）

一九五八、四　大阪大学大学院文学研究科修士課程入学
一九六〇、四　西宮市立西宮高等学校定時制課程専任講師
大阪大学大学院文学研究科博士課程進学
大阪府立今宮高等学校定時制課程教諭
一九六二、四　高野山大学文学部英文学科専任講師
一九六三、三　大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
一九六四、四　神戸大学教養部専任講師（英語担当）
一九六五、九　UCLA大学院、オクスフォード大学留学（～一九六六、八）
一九六六、九　ケンタッキー大学客員助教授（～一九六七、六）、日本学科設置、比較文学、日本語・日本文学講義
一九六八、四　神戸大学教養部助教授
一九七八、十二　文学博士（大阪大学）
一九七九、四　神戸大学教授（文学研究科、教育学研究科兼担）
一九八二、九　ニューハンプシャー大学客員教授（～一九八三、六）、大学院＝20世紀英文学、学部＝比較文学、日本語・日本文学講義
一九八七、四　神戸大学、西洋文学担当に配置換え
一九九三、三　神戸大学退職（五十九歳）
一九九三、四　広島女学院大学文学部教授
一九九五、四　同大学院担当。文学研究科長、学院・大学評議員（～一九九八、三）
一九九七、四　同大学院博士後期課程論文指導担当
一九九九、四　同大学特任教授
二〇〇〇、四　京都女子大学文学部契約教授、大学院博士後期課程論文指導担当　（～現在）

学会シンポジューム講師（以下、日時、テーマ等すべて省略）

日本英文学会（ローレンス、ジョイスなど）、日本ウルフ協会、日本ローレンス協会、日本文体論学会、世界鬼学会、ほか

非常勤講師

大阪大学大学院、文学部、教養部。神戸海星女子大学文学部、神戸女学院大学文学部、園田学園女子大学文学部、神戸学院大学

集中講義

愛知県立教育大学、高知女子大学、大阪女子大学、松山商科大学、香川大学、岡山大学、海星女子大学、広島女学院大学大学院、大谷女子大学大学院

市民講座等

朝日カルチャーセンター、大阪、神戸。神戸市民大学、芦屋市民大学、ケンブリッジ大学夏季セミナー（書道実技）、芦屋市民センター絵画教室（これのみ現職）

特別講演等

大阪成蹊女子短期大学、立命館大学、神戸親和女子大学、就実女子大学、大阪外国語大学（留学生別科、日本語、日本文化）、神戸大学公開講座、日本ハーディ協会、日本ブロンテ協会関西支部会、1986 D. H. Lawrence International Conference、UK、京都女子大学公開講座、京都女子大学英文学会、広島女学院大学公開講座、日本文体論学会、ロータリークラブ、世界鬼学会、地球温暖化防止京都会議議長団対象（美山町一九九七）、日本ブロンテ協会、ほか

学会役員

一九七四～現在　日本文体論学会理事、常任理事
一九九五～二〇〇〇　日本ロレンス協会副会長、会長
一九九四～二〇〇三　世界鬼学会副会長、会長、現在特別顧問
二〇〇一～現在　テクスト研究学会代表

業績等一覧

著書

1. 『言語と文体』（「視点と文体をめぐって」）共著、大阪教育図書、一九七四
2. 『イギリス小説とその周辺』（「ロレンスにおける曖昧の本質」）共著、大阪教育図書、一九七七
3. 『作品と読者』（「D・H・ロレンスの文体と印象派絵画」）共著、前田書店、一九七七
4. 『ロレンスの舞台——長編小説の文体と構造』単著、山口書店、一九七八（博士学位論文）
5. 『イギリスの現代小説』（「*Mrs.Dalloway* 覚え書き」）共著、東海大学出版会、一九八八
6. 『文体論の世界』（「各国の文体論、イギリス、アメリカ」「文献解題、イギリス、アメリカ」「文献リスト、イギリス、アメリカ」）共著、日本文体論学会編、三省堂、一九九九一
7. 『D・H・ロレンス『狐』とテクスト』（「『狐』の文体」）共著、国書刊行会、一九九四
8. 『風景の修辞学』（「はしがき」「情景描写の思想と文体——G・チョーサーからM・ローリーまで」「各章解題」）編著、英宝社、一九九五
9. 『ロレンスと現代』共著、国書刊行会、一九九五
10. 『言語の空間』（「作者の介入と作品の統一」）、共著、広島女学院大学大学院編、一九九九（第七十六回日本文体論学会特別講演原稿）
11. 『過去40年間の文体論』（「日本における文体研究」）共著、日本文体論学会編、三修社、二〇〇五年刊行予定

編集解説

A Conversation on D. H. Lawrence, Ed. by Haruhide Mori, Univ. of California, Los Angeles, 1974

編注

『D・H・ロレンス』（単著）山口書店「現代英米文学セミナー双書11」（小池滋、米田一彦、金関寿夫、森晴秀編集）一九八〇

学術論文

1. 「ロレンス『虹』の文体」学園論叢 No.1、神戸大学、一九五六、五、三一
2. 「*The Rainbow* の構造——イメージの発想及び錯綜と展開」*Osaka Literary Review*、No.2、大阪大学大学院、一九六二、四、一
3. 「矛盾と焦燥の表現——*Women in Love* の人物とイメージ」*Prelude* No.6、一九六二、四、一
4. 「芸術の崩壊——『エアロンの杖』と『カンガルー』の思想と表現」*Osaka Literary Review* No.3、大阪大学大学院、一九六三、七、一〇
5. 「ロレンスの戯曲に関する覚え書き——『ホルイロイド夫人』『一触即発』『ダビデ』*Prelude* No.7、一九六三、一一、五
6. Lawrence's Imagistic Development in *The Rainbow* and *Women in Love*, *ELH*, Vol.31, No.4, The Johns Hopkins Univ. USA, (1964, 12)、修士学位論文、カリフォルニア大学フォーク財団留学賞受賞
7. 「D・H・ロレンスの表現形式」*Kobe Miscellany*, No.3、一九六五、二、一五
8. 「D.H.Lawrence: *The Plumed Serpent*」文体論研究、No.17、日本文体論学会、一九六五、六
9. 「失われた文明——ロレンスにおける喜劇性」*Kobe Miscellany*, No.6、一九七二、一二
10. 「文学作品にみる英語の変容」英語研究、研究社、Vol.9、No. 6、一九七三、一二
11. 「神話と現実の狭間——D・H・ロレンス『翼ある蛇』」近代 No.48、神戸大学、一九七四、二、二〇
12. 「思想構造とパラグラフ構造——ロレンスとウルフ」村上至孝教授退官記念論文集、英宝社、一九七四、四、一〇
13. 「文体と文体研究」(シンポジュームの記録) 共著、文体論研究、日本文体論学会、一九七四、一二、二五
14. 「上昇と下降——ロレンス、フォースター、ウルフ、ハクスレー等における認識の型について」近代 No.50、神戸大学、一九七五、七
15. 「孔雀のゆくへ——*The White Peacock* 論」*Kobe Miscellany*, No.7、一九七五、八、三一
16. 「キュテラへの侵入——*The Trespasser* 論」論集 No.16、神戸大学、一九七五、一二、三一
17. 「D・H・ロレンス『虹』」英語青年 Vol.126、No.7、研究社、一九八〇、一一
18. 「Thomas Hardy の文体——*Tess* から *Jude* へ」山川鴻三教授退官記念論文集、英宝社、一九八一、四、一
19. 「チャタレー夫人の性と俗」近代 No.57、神戸大学、五十六、一二、二〇

20. 「アメリカの大学における文章表現の授業——日本の大学への適用をめぐって」一般教育学会誌 Vol.8、No.1、一九八六、五
21. 「ヴァージニア・ウルフ——俳句——そしてジョルジュ・スーラ」ジャポネズリー研究学会会報 No.6、ジャポネズリー研究学会、一九八七、一一
22. 「剝製人間と昆虫の標本——エリオット、ロレンス、そしてリーヴィス——」英語青年 Vol.134、No.8、一九八八、一一
23. 「D・H・ロレンスの喜劇性——新発見の長編、*Mr.Noon* (1920-21)をめぐって」*Kobe Miscellany*, No.14、神戸大学、一九八九、三、二〇
24. 「遠近法——絵画と文学、あるいは幾何学について」*Kobe Miscellany* No.20、平成六、五、二〇（神戸大学最終講義原稿、一九九三、二）
25. 「ヨーロッパの鬼」世界鬼学会誌2、一九九六、九、七
26. 「作者の介入と作品の統一」『言語の空間』広島女学院大学大学院、一九九九（第七十六回日本文体論学会特別講演原稿）
27. 「『雪国』覚え書き——二種の鏡と色彩の対象」『杉本龍太郎教授古希記念論文集』、大阪教育図書、二〇〇〇

翻訳

1. D・H・ロレンス『ミスター・ヌーン』集英社、一九五八、六
2. アール・マイナー「連歌は「リリック」か、「ナラティヴ」か——比較文学的一考察」国文学、Vol.31、No.4、一九八六、四

書評

1. 西村孝次『ロレンス』20世紀英米文学案内5、研究社。宮崎芳三他編『日本における英国小説研究書誌』風間書店、一九七一
2. 小田基『二〇年代・パリ、あの作家達の青春』研究社、一九七八、宮崎他編、前掲書一九七八（五〇枚）
3. 入江隆則『見者ロレンス』講談社、一九七四、宮崎他編、前掲書一九八〇、（四五枚）

4. 鉄村春生『想像力とイメジ——D・H・ロレンスの中・短編の研究——』開文社、一九五九、『英文学研究』日本英文学会、Vol.LXII、No.2.Dec. 1985
5. 金谷展雄『D・H・ロレンス論——光と闇の交錯』南雲堂、一九八八『英文学研究』日本英文学会、Vol.XVII, No.2, Jan. 1991
6. 井上義夫『薄明のロレンス——D・H・ロレンス I』小沢書店、一九九二『英文学研究』日本英文学会、Vol.LXX、No.2, Jan. 1994
7. Pamela J. Transue, *Virginia Woolf and the Politics of Style*『ヴァージニア・ウルフ研究』第4号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、一九八七
8. Takeo Iida, *D.H.Lawrence*. Yamaguchi Shoten, 1989. *The D.H.Lawrence Review*, Univ.of Delaware,Vol.24、No.3, 1992
9. Masako Hirai, *Sisters in Literature*: Female Sexuality in Antigone, *Middlemarch*, *Howards End* and *Women in Love*. Macmillan, 1998)『D・H・ロレンス研究』日本ロレンス協会、No.9、一九九九
10. Takeo Iida, *The Reception of D.H.Lawrence Around the World*. 九州大学出版会、一九九九、『比較文学』第43巻、日本比較文学会、二〇〇〇

雑

1. 「ロレンスとの対話」『英語とエッセイ』大学社、一九六五
2. 「国情を反映する英語指導法——イスラエル、南ベトナム、ナイジェリア、コロンビア、スーダン、韓国等の関係者へのインタヴュー」English and Pedagogy, No.5、三省堂一九六六
3. "Articles on D.H.Lawrence: A Bibliography.1916-1965" *Kobe Miscellany*, No.5, 1968（単著）
4. 二宮尊道著『ロレンスとエリオット』（第1部「ロレンス」解題）研究社出版、一九八二.
5. 『日本の教育をよくするために』（編著）山口書店、一九九二（コナミ「上月教育財団」資金（一、五〇〇万円）によるアメリカ、フランス、イギリス、スペイン、タイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリア等の、小、中、高、大学、文部省等の調査報告書。（一九八七～一九八九）
6. 『駒子の唇——絵と文』山口書店、一九九三（単著）

7. 文化交流誌『道』山口書店、編集主幹　一九七八～一九八〇

対談

1. 天竜寺管長平田精耕老師「禅の国際性」『道』山口書店、一九八一、秋号
2. 『森　晴秀対談集・神戸を語るえとらんぜ』（編著）神戸新聞出版センター、一九八二
3. 『小島輝正対談集』（「酒とロレンスの性哲学」）神戸新聞出版センター　一九八四

（※　「英語青年」、新聞、雑誌等の書評欄、新聞記事等多数、すべて省略）